

<対 談>

外交の時代と日本



「ニクソン・ショック」と印パ戦争をめぐるって

なか じま みね お
中 嶋 嶺 雄

東京外国語大学助教授

かみ や ふ じ
神 谷 不 二

慶応義塾大学教授



本誌 今日 対談は「外交の時代と日本」というテーマでお願いしたいと思います。日本にいわゆる「ニクソン・ショック」を巻き起こした、国際政治の戦後体制を転換するようなニクソンの一連の政策転換は、国際政治が従来の二極的な冷戦時代から柔軟な多極化時代に入ったことを象徴的に示したわけだと思っています。

そしてそういう多極化時代において、日本をはじめ従来のようなイデオロギー的・軍事的な対立により硬直化した国際関係からある程度自由になり、より柔軟な行動のできる時代、それを外交の時代といえは、そういう時代に入ったというふうに考えられるのではないかと思うわけです。しかし日本は、これまでアメリカがしいた戦後の国際政治の体制に安住してきたところがあつたために、そういう外交の時代にどう対応したらよいのか非常にとまどいを感じて、これからどういうように国際政治のリアル・ポリティクスに国家として向かっていくかということについて思案したのではないかと思われるのです。

ところがまさに日本にとりそういう意味で困難な外交の時代に入ろうとしたとき、印パ戦争という外交の時代以前の戦争という難

しい問題に直面したわけです。

そこでこの問題から一応話を進めていたいただきたいと思うんですが、一つは、中国が国連に参加した、あるいはアジアにおける三極構造と言いますか、多極化した国際政治というものもが展開されはじめた時点において、そういう国際政治の構造的変化が印パ戦争にどういうような影響を与えたかというようなこと。また逆に、この印パ戦争をめぐって米中ソの動き、特に中国の動きというものを注目しなければいけないと思うのですが、それがまた日中関係にもかかわってくる問題でもあると思いますし、国連の問題でもあると思うのです。そのあたりからまず神谷先生に何かお話をしていただきたいのですが……。

ショックではない頭越し米中接近

神谷 簡単に、外交の時代ということと関連させてインド、パキスタンの戦争について感じたことを言いますと、ニクソン訪中の発表があって、それ以来何か冷戦という国際政治の忌まわしき現象が、眼からうろこが落ちたと言いますけれども、そんなような感じではたなくなつて、アジアにも明るい要素が出てきたという受け取り方が一般に多いので

すけれども、実は緊張対立の総量というのはあまり変わっていないくて、ただ、いままでは緊張対立がもつぱらアジアでは米中関係というところに集約されていたのだけれども、それが拡散しただけだという、拡散したという感じを非常に受けるんですね。

もちろん印パの関係というのは、きょうやきのうに始まった対立関係じゃなくて、もとをたせばガンジーとジェンナーとの間で、一九四七年にああいいう形で国境をつくつたというところにそもそも問題がありますし、この点はアラブ、イスラエルの対立と共通するわけですから、ある地域ではまだまだ一方では脱イデオロギーと言うか現実主義と言うか、そういう路線がだんだん進行しているのが世界の大勢ですけれども、一部には宗教的な対立というものでお互いに血で血を洗うような紛争まで行くという地域が残っているわけですね。だから、米中接近がこれからどう進もうと、ますますというか、あるいは依然としてというか、世界政治とりわけアジアの政治の上ではいろんな形の紛争とか対立というのがなくならないということを、はしなくも象徴したものだと言えらうと思うんですね。ニクソン・ショックあるいは頭越しの米中

接近ということがよく言われますが、頭越しというのは、何も今回が初めてじゃなくて、たとえばドイツの頭越しに米ソの平和共存関係がだんだん進行して行ったという先例などもあるわけですね。どういふ場合に困るかと言いますと、頭を越されたまん中の国が非常にかたい一定の原則なり方向なりを頑として守るという姿勢をとっているときに頭越しをされて、頭を越した結果出てきた周囲の体制が逆の方向に行っている、別の方向に行っているという場合に非常に困るわけですね。ドイツの場合を見ますとアデナウアーに象徴されるわけですが、少くとも二つの点で、要するにドイツの統一が先に解決されるべき問題で、ヨーロッパの平和の問題というのはドイツ統一のあとの問題だという柱と、もう一つはドイツとポーランドの永久的な国境はオーデル・ナイセ・ラインではないという、その二つの立場を頑として守ったアデナウアーの路線というのは非常にかたい路線でして、六〇年代前半に頭を越された、その頭を越された周りの体制というのはいさういうアデナウアー路線には反するものだったわけですね。そこで、ドイツの場合を見ますと、六〇年代の後半五、六年かかって、徐々に人も変

わりそれにつれて方向も変わって、ようやく一九七〇年の夏の西ドイツ、ソ連の武力不行使条約、十二月のポーランドとの条約、最近のベルリンの協定、それでやがて東西両ドイツの話し合いがおそくまとまるといふところまでようやくきたわけですね。五年かかっているわけですよ。

これは困った例の一つの見本だと思うのですけれども、日本の場合は頭を越されてどうだったかと言えば、越されたことについての問題はいろいろありますが、それを別にして言うならば、頭越しとかショックといつてもドイツほどの困り方は実はしていないのではないだろうか、ドイツほど困る条件というのは日本にはないのではないか、これはあくまでも比較の問題ですけれどもね。つまり、日本はドイツほどこういう方向で行くんだというかたいきまいった姿勢をとっていたわけじゃないか、よく言えば非常にフレキシブル、悪く言えば無原則な対外的姿勢をとってきたわけですから、その意味では比較的、ショックとか頭越しとか言っても、実はそれほど響かない要素があるので、したがって今後の問題ということになればたしかに日米関係にしろ日中関係にしろあるいはその他の関係に

しろ、いままでとはいろいろ異った条件が出てきているんですけれども、やり方さえよろしきを得れば十分に、ほんとうの意味での多角的な外交の時代に対応して、しかも印パ戦争に見られるような、依然として紛争や波乱を免れないアジアの情勢というものに対応し得るはずである。あとはわれわれの才能というか叡智というか、それ如何によるので、客観的な条件として八方ふさがりだということではない。そんな感じがするんですけれどもね。

中嶋 それは、頭越しが日本にとってはドイツにくらべてそれほどの重要さがないという……。

神谷 いや、重要性の問題じゃなくてそれでもついでにいままでとついていた方向を、ドイツの場合は五年かかって逆にしたわけですね。

それほどのむずかしい問題が急に出てきたということではないと思うんです。たとえば頭越しがなくとも日中関係の正常化というようなことは、ある意味ではすでに時間の問題だったわけですよ。

人類の踏み絵印 戦争

中嶋 それはたしかにおっしゃるとおり

で、頭越しの米中接近というものが、ある意味では心理的な緊張を伴って論じられていすぎるんじゃないですか。

実害とか、実益とかいうことからすれば、米中の接近によってほんとうに実害が出た、もっと困難な立場に置かれるのは決して日本じゃないわけで、ベトナムでありアジアであり、今度のようなむずかしい問題が出てくるドロドロしたまさにイデオロギー的な状況ないしは民族的な憎悪なり強烈な民族意識や人種意識なりにとらわれざるを得ない諸國のほうが、米中接近というような国際政治における大國の論理にはるかに影響されやすいのであって、日本の場合はその点ではそれなりの基盤が多少なりともできているわけですね。

印パの問題に戻るんですけれども、神谷さんとちよつと違ひかもしれませんが、今度の問題はそういう意味から言いますと、心理的と言うよりもむしろもつとエモーショナルな課題としてあると思うのですよ。同じような宿命的なパターンはアラブとイスラエルの対立を軸とする中東紛争にもありますけれども、アラブとイスラエルの場合は、とにかくイスラエルが独立したあと依然として紛争が

起こってきているという問題であるし、今度の場合はベンガラ・デシュという、いわば民族自決とか、民族自治とかをかがげたベンガル人の血の雄叫びであるわけで、パキスタン内部における深刻な「差別」の問題でもありますね。そして、パキスタンというまだまだおくれた社会状況の中で、なぜあそこでさらに戦争を、殺しあいをしなければいけないかという問題が、われわれ先進社会に生きている者からすれば当然提起されるんですけれども、にもかかわらず、あれだけの血で血を流す紛争が起こらざるを得ない必然性というところに、そのことの持つ悲劇性があると思います。それだけに日本国民の間にも今度の問題はそういうエモーションナルな雰囲気をはかり立てているんじゃないかと思えます。現に、今度の東パキスタン問題で救援活動とか、事態の本質を訴える運動なんかの一部で起こりつつあるということからも、そう言えるかも知れません。

それはある意味ではこういうことじゃないでしょうか。元フランス文化相の作家アンドレ・マルローが今度東パキスタンへ行くという。いわば三〇年代のスペイン人民戦線、スペイン戦争とどこか似通ったところが一方に

ある。ところが一方には同じ三〇年代に独ソ不可侵条約というものがあって、まさにスペイン戦争でかき立てられたようなインテリなんかのエモーションナルな行動は最後のにそこで挫折して行っただけですけれども、今度の場合は逆に大国間が三極化とか言われている状況の中で、他方では大国というものの政治がはなばなしく展開されようとしているときに起こっているという問題があるわけです。

三極構造というようなことを僭に言うんですけれども、表面的に、ニクソン訪中、ソ連にニクソンが行くこと、あるいは中ソ会談とか、そういう次元で見るとたしかに世界は三極によってリードされているんだけれども、問題はやはりそれ以外のところで非常にドロドロした、現在のわれわれの文明なりわれわれの社会が解決を求めなければいけない、にもかかわらず非常に解決が困難な問題がそこにあるんだということを思い知らされたような気がするんですよ。

そこで、印パの問題というのは国連でどのような解決策をはかれようとも、アジアの、特にインド亜大陸においては五十年、百年という単位でしこりを残すであろう問題だと思えますね。しかも一方で中国はみずから二つ

の超大国米ソを批判する形で国連に出てきた。にもかかわらず中国がとっている行動というのは、ことはの上での超大国批判にもかかわらず、パキスタン問題を見ますと中国自身のナショナル・インタレストと言いますか、インドとの利害関係の対立、それを背景とする中ソ関係、そういうものの中でパキスタンの軍事政権を支持している。しかも軍事援助も与えている。まさに喬冠華が国連に乗り出して行くその前夜、中国では西パキスタンのブット代表団を招いているわけです。その結果どういことが起こっているかという、すでにベトナム戦争以上の犠牲者が出ていると言われる印パの紛争において、とにかくベンガラ・デシュをどう評価するかということとを別にしても、抑圧する側の銃はアメリカ製であると同時に中国製であるという事実、消し去ることのできない事実として残ると思うんです。

このことほど、中国のことばの上での「自分たちは超大国を批判して弱小国、中小国、しいたげられたものの味方になるんだ、民族の解放、民族の自決を支持する」といってきいた、いわば中国の革命的原則性というものの虚偽、その原則と中国の実益との矛盾という

ものを、うつし出している鏡はないように思ふんです。

そういうふうに見ますと、今度の問題は大きく言えば人類全体に対しても踏み絵であると同時に、特に中国にとっては非常に大きな踏み絵じゃないかと思うんです。中国はパングラ・デシュを第二の満洲国だと言っているそうだけれども、これはどう見ても事実経過からしてもそうではないんで、そこには中国自身のむき出しの利害もあるし、そういう利害のもとでは被抑圧民族の味方になるんだということばがもうくもくずれていくという問題があるように思うんですけれどもね。だからこの点でもかなりエモーショナルな課題だろうと思うんです。

もう一つは、通俗的には中国が世界を動かす、とにかく世界は中国を中心に動くんだという形で見過ごされているんだけれども、国連から除外されたあの台湾の運命だと思ふんですよ。日本が台湾問題については中国の内政問題として干渉しないという立場をとるのは、それはそれでいいと思いますけれども、それにもかからず台湾というのは残るわけです。依然として千四百万、千五百万の民衆が、蒋介石政権に対するいろいろな不満

を持ちながらも、毛沢東中国には決して行きたくないという多くの国民が存在している。それが世界秩序の中から取りこぼされて行ってしまう。これをわれわれはどういうふうに見て行くかということは、かなりエモーショナルな課題として残ると思うんです。

日本は、今後日中関係の開閉という方向に向かつて台湾問題にコミットしないという姿勢をとるでしょうし、それが一つの中国に対する日中関係の戦略としては正しいと思うけれども、いかに日中関係がうまく行っても、国交回復という道がまっしぐらに開けて行つたにしても、その問題は残りますね。しかも台湾というのは日本人としても歴史的にかかわりあってきたわけでありまして、それだけにこの問題は同じような課題として残ると思うんです。

としますと、日本は六〇年代の高度経済成長によつてエコノミック・アニマルと言われ、またある意味ではそれは必然なことでもあったんですが、そういう状況の中でこれからの日本外交は脱イデオロギー化した大国のパワー・ポリテクスの間で展開される合理的な国家関係を模索して行かなければならぬ。日本もできるだけ合理的な形を求めなけ

ればいけないと言われる新しい外交の時代に、逆に、エモーショナルな外交課題というもの、国際関係におけるエモーショナルな要素というのが一方では色濃く出てきている、それをどういうふうにかえていくかということの重要性を感じましてね。

神谷さんも、かつてご著書の中で外交を、ロースとパトスとエイトスと三つのエレメントで分析されていたと思うんですけれども、日本にかつて外交というものがあつたとすれば、パトスにおぼれたとき必ず失敗していますね、中国に対してとくにそうだったと思うんです。

パトスにおぼれた形での対外関係というのは失敗する要素が多いんで、それは反省しなければいけないだと思います。同時に全体が脱イデオロギーとか、文明化された社会の中での国際関係が、しかも国連という場はそれをまさに制度的に取りつくりつづけている機関だと思ふんですが、そういうものに中国も入つてきて一方で非常にはなばなく外交戦略が展開されていながら、他方のそういうエモーショナルな要素にどうかかわって行くかというのとはなかなか難しい問題だという感じがするんですけれどもね。

アジアの平和は現状凍結で得られるか

神谷 日本では普通米中接近を機会に、アジアにおいても冷戦構造から多極的な均衡のほうへ移ってきたという明るい面だけを見るような見方が多かった。それに対する今度の印パ戦争などというのは必ずしもそうは言えないという警鐘を乱打したようなことになると思うのです。

おっしゃるように、これからの日本の外交で一ばん先立てなければならぬものは、むしろロゴスのほうでして、パトスにかかわり合うことが多ければ多いほど、過去においても誤りをおかしてきたということは全く確かなんで……。

ところで、国際連合の印パ戦争に対する機能というのをみても、これもまだ動きはじめてばかりですからどうなるかわからないのですが、中国が一枚加わったことによって、問題をより複雑にし、むしろかしくしているという面がたしかにあるわけですね。中国が国連に入ったほうがいいのですけれども、中国が国連に入ったことによる問題もあるという両面が当然あつたはずなんで、いままでは歓迎、歓迎だけでやってきたのが、歓迎する反面非

常にむずかしくなるという点も、今度はじめて教えられたと思うんです。

多角的な外交というのは、一面ではたとえば世界戦争の勃発とか、そういうことに立ち至らないようにする点では大きなプラスがあると思いますけれども、大国に直接間接かわりの大きいローカルな紛争に対しては、ある意味ではいままでより無力になるということにはたしかにあるわけですね。そうやってきますと、国際秩序の平和的な変更という問題が非常にむずかしくなってくるということをはくは感じるのですよ。

ヨーロッパは原則として、六〇年代を通じて現状凍結による国際平和という線まで進んできて、いまやそれがかなりの程度まで定着しましたですね、さつき触れましたドイツの新しい東方政策をきっかけにして……。

ところがアジアの場合には、その現状にまだまだ不合理な点が多くて、したがってアジアの平和と安定というものを得るためには、そういう不合理な矛盾した面を平和的に変更しながら、変更を通じての安定であり平和でなければならぬということとは、多くの人によって言われてきたわけですが、こうなつてまいりますと、現実の問題としては結

局どんなに不合理であれ、現状を凍結する以外に平和を守る道はないということになるおそれがありますね。

たとえば安保理事会では拒否権が出たりして合意が成立しない、そこで総会に話を持って行けば、当然、事の是非善悪は問わずとにかく鉄砲の撃ち合いをやめろということになる、あるいは、もとの状態に戻れということになる、それ以上にはなかなか行きませんね。その合意というのは、非常に広範な合意は得られるでしょうけれども、実は基本的な問題の解決にはあまりつながらない合意でして、アジアでも結局、平和というのは現状凍結以外よりどころがないのかという問題も新しく出されてくるのではないかと思うのですが。

通用しない日本のきれいごと外交

中嶋 たしかに国連というのは、中国が入ったことによって問題の解決はますますむずかしくなるわけで、その意味では国連の機能は、形式的には中国が入ったことによってより完全なものに近づいたのですけれども、実質的には機能低下という可能性も出てくると思うのです。

そういう意味で日本は、今日のテーマにか

えると、一口に国連外交とかいつもいうわけですが、そういう国連外交というようなものはたして今後も日本外交の一つの大きな目標として言い続けることが、どれだけ意味があるかどうかということも十分考えてみなければいけないのではないかと思いますね。

神谷 あれはもともと岸内閣のときから言いつたのです。外務省が毎年一回、外交青書というのを出すようになって、その第一回のときから、日本外交の三本の柱ということで、一本の柱として国連中心主義というのをうたい始めたのですから、最初から国内消費——国内だけじゃなくて国外消費もありますが——、とにかくそういうマス・コンセンション用のスローガンでして、毒にも薬にもならないようなところがありましたね。

しかし、いまやそういう限定つきでも国連中心主義などというのは軽々に言えないという面もありますね。

中嶋 今後の七〇年代、八〇年代の日本の外交を一口に国連中心主義と言いますでしよ。それはどうもきれいごとなんです。

神谷 それはそうですよ。

中嶋 日本というのはどうもきれいごとが好きなんです。きれいごとについでいけば

安泰であるという感じがあったし、それで従来済んできたと思うんです。ところがいまの日本は世界から非常にたたかれてもいるし、日本のイメージは悪くなっていると云われるんだけれども、逆に考えてみますと客観的に日本が国際社会において占めている位置というのは、日本は国連の常任理事国ではないにもかかわらず非常に大きいと思うんです。それは単に外交という次元じゃなくて、世界経済に占める位置とか、特にアジアにおける社会的文化的な意味でも日本というのは大きい意味をもっているわけです。

それだけに日本に対する期待も、日本の果たすべき役割りもあるんだけれども、そういうときに一方で日本がきれいごとだけ言っているのかどうかという問題があると思うんですよ。それは今度の印パ紛争に關してもおそらく日本政府は、あるいは外務省当局は、日本はインドにもパキスタンにもくみしない厳正中立を維持するということを言い続けると思うんですよ。

台湾の問題についても、これは世界の情勢を判断して日本は台湾問題にはコミットしないということ、中国は一つであるということ、を言い続けると思うんです。

これは先ほど私が言ったように、すべてきれいごとなんです。きれいごとだということはいわばそういうエモーション的な要素を全部遮断しているんだけれども、また外交というのはパトスに全部おつかぶさった場合に失敗するし、日本はその轍を踏んではいけないんだけれども、しかしいかにしてそういう世界のパトスで動くイデオロギー、ある意味ではイデオロギーとパトスが一緒になった、そういうものを、一体国際関係の中にどういうふうに組み入れて行くかということが重要であり、それをしないと日本がいくら日本の新しい外交を叫んでも、実際にアジア人の心をとらえられないのじゃないかと思うんです。

その意味では私は、中国の国連加盟というのをこういうふうに思うんです。たとえば中国が核兵器を開発する段階でさかんいろいろなことを行ってききましたね。ところが一発核兵器をつくった段階で中国の核戦略というのは大きな意味を失ったと思うんです。それと同じように、中国が国連に入らないうちに、超大国を批判していた状況と、今日国連に入ってしまった状況とは、そういう一発の核兵器を持ったときの意味と同

じような変化があるわけで、中国の超大国批判というのはその限りで意味がなくなっていると思うんですね。中国自身が好むと好まざるにかかわらず、私はむしろ好むと言いたいんですけれども、やはり国連の大国として登場しようとしているわけですし、そういう準備をすでに国内的にはこ一、二年来やってきていますし、しかも中国はそのことによつて第一国連憲章を守れなんていうことをさかんに言い始めているわけですよ。あれほど国連をののしっていた中国が国連憲章の精神を言いはじめたからには、国連憲章を変更したくないということですよ。つまりそういう既成の秩序の中に乗って、国際社会における体制側に乗って行くことだと思ふんですね。ただその場合に、ことばの上では依然として米ソ二超大国批判ということをするんだけれども、それは米ソに対する批判としては説得性があつても、いわばそれに取りこぼされていつている諸国には説得性が無い、まさにそういう中で印パ紛争は起こっているわけです。そういうところから中国の主張はますます説得性を失っていくんじゃないかと思うんです。その説得性を失つたそういう中国と中小国との間のギャップというものが、今後ますます出てくるであらうし、その場合に今度のバキスタン問題というのは非常に重要な意味を持つと思うんですが、そうしますと、そういういわば取りこぼされている諸国の心をとらえて行くことが、今後の日本外交にはもっと必要だと思うんです。

特殊性を生かした日本外交の転換を

神谷 それは全く同感でして、中国が新しい国連なりあるいは外交の時代なりで、一体どういう位置を占めるか、いまの中島さんの分析に全く賛成なんです、日本は幸か不幸か米中ソが持つような核も持ちませんし、経済的に見ても米中ソが対外的なかかり合いをあまり持たなくてもやつていけるという国柄であるに對して、日本は国際的な相互依存関係というのがなしには生きて行けない国だという、そういう特殊性がありますから、そういう特殊性を生かして行くというのは、中島流に言えば取りこぼされた国ということになるんですけれども、別な言い方をすればアジア諸国との日本の新しい独自のかわり合いということにもなると思うんですけれども、それを開発して行くことによつてある程度三国に對抗することもできるだらうし、もしそれ

によつてもなおかつ三国には對抗できないという面が残れば……、これは必ず残りますよ。残れば残つたでいいと思うんですよ。

中嶋 だからその意味では日本というのは合理的な国際関係を模索しなければいけないんだけど、その場合にやはりきれいごとだけでは済まない面があるわけですね。

ぼくはそれを一ばん痛感したのは、一昨年（一九七〇年五月）カンボジア問題のジャカルタ会議のときなんです。あのときたまたまジャカルタに行つておりました、日本はあのときはいわばカンボジア問題に対してはハト派として、きれいごとを言つたわけですね。それは会議の席上ではたしかに成功したと思うんです。しかもバンドン精神なんかを思い出してそれをその声明の中に入れた。ところがジャカルタ会議というのは結局何の意味も残さなかつたですね。カンボジア問題の解決には……。これはいわばそういうきれいごとだけでは済まない、非常にドロドロとした現実がやはりアジアの中にある。カンボジア問題一つをとつてもそれは単なるアメリカのインドシナ半島の政策という問題だけではなくて、まさにクメール文化、クメール民族とベトナム人とのドロドロしたかわり合い

があり、ある意味ではいまのベトナムが中国に対して二千年来のそういうドロドロしたかわり合いがあると同じように。だからベトナムと中国との関係というのは共同歩調をとっていながらも、どこかで違うと同じように、カンボジアにはカンボジア人のベトナム人に対するたいへんな憎悪とコンプレックスとがある、黒い憎悪とほくは言ったんですけれども、そういうようなものがあるわけですね。

そういう現実があるにもかかわらず日本が国際会議できれいごとを言った。これは何の力にもならなかったんですけれども、たとえば現実には戦争の脅威にさらされているインドシナ諸国とか、そういうところから見れば日本はきれいごとを言って逃げているんじゃないか、日本は台湾とも韓国とも非常に仲がいいにもかかわらず、いかにもハト派みたいな顔をして、同じ穴のムジナであるにもかかわらずそれを隠して行動するのはけしからんというようなことを言うわけです。

これは、そういう現実があるということをも十分認識しておかないと、いわばスマートなハト派的な外交、それはそれとして正しいと思うんですけれども、それだけではアジア人

の心をとらえられないということも大いにあるといえるんです。

逆に言うとも日本は、中国がこういう形で登場してきたことによって、日本外交の非常に大きな転換のチャンスを与えられているわけですね。しかし従来アジア諸国のいわば精神的な支柱は、いろいろな問題があるにもかかわらずとにかく中国であった。その中国に対する幻滅が出はじめています。これは中国の国内で文化大革命であれほどの犠牲と混乱を伴いながら確立したと思われた毛林体制というもの、が、わずか二年半でガタガタとくずれて行ってしまっているという現実、そういうものに対して、文化大革命とは一体何であったかということ、いま国際的にもあるいはおそらく中国の民衆の中にも、まだ中国の民衆は林彪の失脚について知らされていないけれども、出てくると思うんですね。

そういう時期なのであって、従来米ソという二極の象徴の中で中国というのはもう一つの違った勢力——第三勢力の代表であると思われていて、それに対する期待があったにもかかわらず、その期待が次々に裏切られていくような状況がありましたし、そういうときに日本がそれを肩代わりということはできな

いにしても、その間隙を埋めて行くということが大事じゃないかとほくは思うんです。

日本の限界と文化外交

神谷 ほくは理論的にはいまのお話にそれほど異存はないんですが、ただ現実にはそういうドロドロとしたアジアの状況に、どう日本が具体的に対応して行くかという段になりますと、これは非常にむずかしい問題だと思ふのです。基本的な姿勢としていまのような点に思いを至すことは大いに必要だと思いますけれども、実際の問題としては日本が一体何を成し得るかということになってきますとかなり限られてくる。もしジャカルタ会議にあらわれたようなきれいごとでは済まないということになりますと、実はそれから先というのは日本の、ある意味で外交能力を越えるものになってくるんじゃないかと思うのです。そこをどう考えるか、しよせん日本はあるいは経済大国であるかもしれないけれども、世界政治大国というか、外交大国ではあり得ないわけです。これはいくら頭を越されてじだんだん踏んだってそれはそうなので、その点とはよく認識をしておく必要があるんで、その認識から出発して考えますと、今後

とも新しい外交の時代に日本は賢明に対処して行かなければならないけれども、その姿勢は、総じて言えばやはり受け身といえますか、いかに対応するかという点が主になるんで、リーダーシップとかイニシアチブをあまりとるということとはできない。

だから、たとえばアジア諸国に対して直接的に、中国を含む国連の常任理事国になっているような大国の、アジアに対するアプローチのしかたの欠点はついて行くという、そういうところから徐々にはじめて行く以外にはないんじゃないだろうか。あともちろん援助協力の強化とか、そういう別の面はありますけれども、非常にエモーショナルな、ことばをかえて言えばイデオロギーもそれにかみ合ったような、その問題にじかに日本が出て行くということとはできないでしょ。

ですからそういう意味でも多極化した新しい外交の世界は日本にとってたしかに選択の機会、幅を広げたという面と、幅は広くなつたけれども日本の能力という点から言えば、実は問題がむしろ少なくなったという制約のほうが大きくて、選択の幅が広がったという客観的な事態をそれほど利用はできないという

新しい悩みが出てきているんじゃないだろうか。

これからはいままで以上に、ある意味では日本外交の成し得ることに對する限界と言いますか、あきらめと言つてはちょっと言い過ぎかもしれないけれども、そんなにリマールカブルなことはできないんだということに耐えて行くという面の修行が必要になるんじゃないですかね。

中嶋 おっしゃるように、たとえばかりにいくらパングラ・デシュの運動に共感したからといって、日本が武器を援助したり軍隊を派遣することはできないわけですし、それはすべきことではないわけですから、その意味ではある一定の程度はいわばきれいごとを言わざるを得ない面も日本の置かれた立場としてある。

問題は、そういう中で外交というのは単に経済外交だけでもないわけだし、日本のでき得る範囲で外交というものの考え方、外交というのとは国連の場でハデなことをやることでもないし、それはたしかに外交なんですけれども日本のできることでもないし、ニクソンみたいに次々と保険をかけてやる、ハデな外交を見せかけながら心にくいばかりに保険を

幾つもかけた外交をすることもできないわけだから、神谷さんがおっしゃったように国際社会との交流を常に持たなければいけないという、日本国家の存立条件からして外交というものの位置づけをもっと根本的にやってみる必要があるんじゃないでしょうかね。そこには文化外交とか、もっと広い文明的な視野を含んだ国際交流というようなもの、そこまで入れて外交だというふうな感覚の転換をこの際しないと、どうしても日本はその間隙を埋めて行くことはできないと思いますね。

必要な新しい外交目標の設定

神谷 ですから、そこで日本の外交は別な点から一つの大きな制約が出てくるので、米中ソ三国とは違った立場にある日本として、アジア諸国との新しい関係というのを考えて行かなければならないと言ったのですけれども、そういうむしろ少なさがあるって、結局、あれもむずかしい、これは能力がないということではぼって行くと、要するに現状のまま鉄砲の撃ち合いさえなければいいということに落ち着きやすいですね。そうすると案外それが、現状固定化による鉄砲の撃ち合いだけはやめるといふ主張が、今後ともかなりの

支持票を得るかもしれない。しかし当座はそれでいいわけですが、それでも、もともとアジアというのは変わらなければ安心しないという要素を持っているわけですから、そういう大きな意味での平和と安定というもつにつながらないようなことを、依然として日本はやっているということになってきはしないか。さりとてそのワクを越えようとしやすと、さつきから話し合っているような非常に大きなむずかしさがあって、なまじそのハードルを越えようとすれば、日本自体が二十六年前の戦争以上のひどい目に合う可能性さえあるわけで、これはやっぱり避けたい。そういうことになりやすと、いままでのコンテキストにはなかったような新しい局面を切り開いて行かなければいけない。それを一体どうやって切り開いて行くかということについては、私もあまり自信のある構想がなくて、頭をかかえているというのが偽らざる気持ちなんですけれどもね。

七一年がそうだったのですけれども、年の始めは公害問題から始まって、アメリカも内向き、ソ連も内向き、やがて中国も内向き、日本も内向きだというようなムードでしたよね。それが夏のダブルショックなるものの以

来、いつとはなしに日中、米中關係ばかりが新聞の紙面を埋めてしまつて、公害とか環境というのは小さくなつてしまつた。

しかし、ある意味では実体的ないものばかりとらえすぎていたという面がありまして、この際ほんとうに日本が考え直さなければならぬというのは、国民的な努力目標というのがいままでのままでいいのかという問題だと思ふんですね。明らかに価値の転換というか、国民的な目標の転換が必要なので、それを考え始めようという話が出たときに、ストッブがかつたような状態ですよね、この七一年というのは……。だから、この際さっき言つたところとまどつてしまわないで何か新しい局面を開いて行くとすれば、急がば回れではないですけれども、日本は日本なりに、いま各国が、先進国は先進国、低開発国は低開発国なりにかかえている共通の問題と、いうのがあるわけで、そういう共通の内部の問題の解決に模範になり得るような、国の中間の変更ということを考えていくということが、短期的にはそんなにできませぬけれども、長期的には国際的な影響力とか発言力というものをつちかつて行く、大きなきつかけになるのではないか。これは正直に言つて少

し問題を回避した傾きがなきにしもあらずなんですけれども、そういう点が実は新しい外交の可能性にもつながって行くんじゃないだらうかという気がするんですがね。

国際比較の重要性

中嶋 いまおっしゃつたことをばくなりに考えますと、ぼく自身も外国へしばしば行くんですけれども、日本人というのは外国から帰ってきますと、やはり日本はいいなあと思ふのですよ。進歩的インテリと称されている人でもやはり日本はいいなと思つてゐるわけです。ただそれを言わないだけで……。

国際社会の中で日本を見ていくという眼が一方必要なのであって、従来、もつと素直に日本を見るということを見ながしなかつたと思ふのです。インテリというのは、政治家の悪口を言わないと自己のアイデンティティがないように思ふのと同じように、日本について、日本のいいところというものを十分確認するということを、特に国際比較においてやるということが十分なされていなかったと思ふのです。みんなその点をこまかしてきたと思ふのだけれども、私は日本のよさというものを国際比較のなかでよく見て行くことが必

要だと思うのです。日本の新聞を見ていると、日本が世界で一ばん悪い国だと思われるみたいな書きぶりです……。

神谷 リンゼイがほめていたじゃないですか。

中嶋 そうなんです。リンゼイが書いていました。日本に犯罪が少ないということは文化的にたいへん問題です。まあ犯罪は多いんですけどアメリカほどではない。それは例え、中国が、あれほど目ざましく国際社会に登場していながら、そして中国人というのは決して郷土や国家というものを捨てた民族ではないにもかかわらず、なぜあれほど多くの難民が香港へ出てくるか、そして中国の中を見えますと決して理想国家ではないわけでしてね。

そういうことを考えると、国際比較ということをも十分やって見る必要がありますね。十分やった上で日本自身のよさを見るときところから、日本外交というものをもう一べん考えて行く、そういうことをやってみる必要があるんじゃないでしょうかね。

神谷 むずかしいですけれどもね。いまでもブライベートの問題にしても、日本というのはかなり世界的には特殊な条件があつては

じめて成立し得るわけですね。近代化というか、ぼくはむしろ現代化と言いたいんですけども、大衆化、情報化等々を含めての現代化現象に、プラス面に伴ってマイナス面がありあらわれないというのは、東海の小島に隔離されてホモジニアスな国民がいるという基本的な、かなり世界では珍しいケースですよね。それらにずいぶん支えられているので、いまの国際比較で現象面だけをとりえていますと、日本というのはかくも偉大な国民であるか、というほうに眼が行ってしまつて、実はこのケースで言えば、恵まれた、世界のほかの国にはあまりない条件が日本にあるんだという点は拮据されてしまう、そういうおそれはありますけれどもね。

中嶋 たしかに偉大だというふうにみんな思おうとするから間違っちゃうんですね。ヨーロッパへ行っても東南アジアへ行っても依然としてカメラをぶら下げて平べったい顔で出てきているわけですから、決して偉大ではないわけですね。にもかかわらず日本のよさというものがあつたわけですね。

東ヨーロッパへ行ってみると痛感するのだけれども、私、ゴムルカの失脚前にポーランドのワルシャワで、たまたまワルシャワ大学

の学生に引きとめられて、カフェみたいなところへ連れられて行って、夜中まで、英文科の学生でしたから英語でしゃべったんですけども、要するにゴムルカ批判を一方でやってポーランドの革新をさかんにとなえながら、彼は日本に対するものすごいあこがれを持っていてわけですね。日本的な自由とか、そういうものを含めての日本というものに對するたいへんなあこがれがあるわけですね。日本はその手と手を結ばないということはないわけですね。文化的にもそうなのであつて、そういうことが実は外交という観点でも必要なのではないか。ところが従来東欧というところの手先である、共產圏という形でしめくつてしまつたけれども実はそうではない。ある意味では東欧が最も親日的だということが言えるわけですからね。

私はしばしば言うのですけれども、日中関係も非常に大事であるけれども、それだけにのめり込んでしまうと、にっちもさっちも行かなくなるわけで、しかも日中関係というのは宿命的に非常に困難があるわけですね。その困難を認識しない議論が多いのですけれども、これからの小さな保険を幾つかかけた多角的な外交が必要だと思えます。ソ連、東欧

がそうであり、東南アジア、東北アジア、モンゴルあたりも含めて、幾つか小さな保険をかける外交を展開する中で日中関係を見て行かないといけないのではないかと思うのである。

対中国外交には小さな保険を

神谷 それは文字どおりグローバルに考えて行かなければいけないので、グローバルに考えて行くということは、私流に言えば急がば回れということでもあるので、急がば回れということだんだん進めて行けば、結局日本の国内問題ということも、実は日本外交の能力の中に入っていくことになるのですが、とりわけいまの東欧の話は、私も前から、たとえば西ドイツが東ドイツを正式の国家ないし政府、そういうたものとして東西ドイツ間に国際関係ができるとなったら、間髪を入れず日本は東ドイツを承認する、一体そういう準備をちゃんとやっているだろうかというところを尋ねたことがあるのですが、どうもそこまで手回しよくやっているとは思えない。しかしそれは当然やっておかなければいけないのです。

しかし、台湾の問題、中国の問題というの

は、ことほどさように簡単に行かないというのは、日本独自の台湾との複雑密接な結びつきがあるからなので、そういう区別がつかないことになってしまわうですね。ことし一年あらわれた日中接近ムードなんかを見てみましても、アメリカが一つの壁にぶつかったからアメリカはこれ以上期待できない、その分を少しでも中国で、結局そういう考えですね。本来ならば、たしかにアメリカとの関係が一つの大きな壁にぶち当たったので、そこでわれわれが考えるべきことは、戦後四半世紀われわれがとってきた基本的な外交姿勢というものに、一体どういう欠陥があったのかというベーシックな反省だと思うのですね。ところがそういう反省は全然ないままに、こちらがつかえたから今度こちらというようにな、至って無反省な……。それでは中国との関係がよしんばできても、ある程度まで行けば必ず壁にぶち当たるに違いない、そういうことです。

中嶋 私がそういうことを言うのは、日中関係を軽視しろということではなく、日中関係は日本にとって何よりも重大な課題であるし、これとの格闘、競合というのは将来にわたって続くし、従来はどちらかが強くてどち

らかが弱いのが歴史的に日中関係だったのですけれども、ところがこれから二十一世紀にかけて、アジアにおいて二つの大きな民族が競合せざるを得ないというところに、日中関係の根本的な問題があるわけですから、それだけにいろいろなコンフリクトも出てくるし、そういうことを認識すれば認識するほど、一方において神谷さんがおっしゃったグローバルイズムと言いますか、そういうことが必要なのではというね。

それを外交の場面でもキメ細かくやって行く必要がある。たとえばモンゴルだけをすぐ承認するということは、日中関係が非常に微妙な段階にあつてかえって刺激が多いと思うのですが、それをグローバルイズムの立場から慎重に考えてゆく……。

神谷 いますぐはちょっとむずかしいでしょうね。

中嶋 それは同時に東ヨーロッパとか、COMCON体制でもいいけれども、そういうところとの全体のかね合いの中で、モンゴルとの友好関係を進めて行く、できれば国交関係もつくって行くということになれば、これは中国に対する日本の立場に「保険」をかけなければいけないわけで、そのために小さな「保

「險」をかけて置くことにもなるわけですね。しかも東ヨーロッパ、ソ連、これはみな中国とそれぞれ微妙な関係を持っているわけで、私は北ベトナム、北朝鮮とも友好関係を進めべきだと思うわけです。

「そういう中国を中心として動いている諸国との間に日本が友好関係をもっと増進して行けば、日中関係、日中交渉における日本の立場も非常に強くなる。中国はまたそれに非常に気を使うと思いますけれども、そういう「保険」のかけ合いを、日中間というのはやって行かざるを得ないわけです。中国はその意味で、中国自身周恩来が日本の頭越しをやっているわけです。佐藤さんではだめだけれどもニクソンさんはいいということですね。

そういうことをチニクして行く意味でも日本は華麗な大きい「保険」をかけるような華麗な外交はできないけれども、小さな「保険」をかけることはやるべきであって、そのためには、グローバルな国際的視野の中から見て、同時に、日本自身を見直すということの中で広い文明的視角に立って、日本と国際社会とのつながりを見て行くということ、外交という問題の中にそろそろ取り入れて行っているのではないか。そこまで含めた

外交ということを考えなければほんとうの外交の新时代ということとは言えないと思いますね。

もう一つは、文化交流とかそういうことも含めて、日本は経済大国になったのだから外貨などをどういうふうにも有効に使っていくかということも、それとの関連で考えてみるべきだろうと思いますね。

本誌 いままでのお話の中で、多極化した新しいアジアの国際政治状況に日本が対処して行くときに、一つは、大国と言いますか文明化された力のある国との間で、合理的な国際関係の中での外交というレベルで日本がどういうふうに対応して行くかという問題と、もう一つは、印パ戦争のような中小国の中で起っているエモーションショナルな問題にどういうふうに対応していくか、こういう二つのむずかしい問題に直面しているのが日本であるということがいわれたと思います。そしてこれからの日本外交は危険性と自己の限界を意識しつつ後者のエモーションショナルな問題にコミットしなければならぬというお話もありました。

そして前者の問題についてはかなりお話があったのですが、後者の問題、大国のパワー・

ポリティクスの間で展開される合理的な外交に日本がどう対応するかということについてもう少しお話し順いたいと思います。たとえば日本が最近の日米関係、特に経済的な側面における競争的な共存関係、対立の中にも協調があり協調の中にも対立があるという、複雑な不安定な関係が出てきておりますし、またアメリカが台湾にとった姿勢の中にも二元外交と言いますか、不明確で複雑な外交が展開されたと思うのです。

そういう完全に多極化した脱イデオロギー的なパワー・ポリティクスがほんとうに展開されているのか、そうは言っても自由主義陣営と共産主義陣営というのは大きく分かれていて、そのファクターというのは従来と変わらないのだというふうに言えるのかどうか。それはこれからの日米関係、安保体制の問題を考えて行く場合に非常に大きな問題だと思ふのですけれども、その辺が基本的な変わってしまったのか、多極化の国際政治状況はそういうふうに変わってしまったのかという問題ですね。

もう一つは、多極化した中で日本も一方において国を守る気概とか、闘う精神が必要だと、あるいは軍備の増強とか核武装というこ

とまで主張する人々も出てきているわけですね。他方においては日本はそういう能力もないし持つべきではないという意見がありますし、国際政治の構造というものはそういうものに見合せてできてきているのだという考え方もあると思うのですが、はたしてどうなのか、そういう問題もあると思います。日本は多極化した国際政治をどのようにとらえて行かなければいけないかという問題についてはいかがですか。

日米関係安定化の条件

神谷 その点は、いつかどこかの政党が言っていましたけれども、等距離、中立みたいな……ね。

中嶋 公明党ではないですか。

神谷 公明党ですか。しかしそうではないので多極化ということを言っても、当然、最も重要な関係とその次に重要な関係とだんだんプライオリティがあるわけです。ただ、ワク組みとして言えば依然として自由、共産両陣営という二極的な要素というのが基本にあるのではないかと。しかしその点はいつまでもそういう考え方にこだわっていると誤ると思うのです。たしかに自由主義が消えてなく

なったわけでもなければ共産主義が消えてなくなったわけでもないし、ぼくは、二つのイデオロギー、二つの体制が漸次収斂していくという、収斂理論がいろいろな形で出されていますけれども、その収斂理論を安直に信奉するつもりはないのですけれども、こと国際外交に関する限りはいつまでも両陣営対立、二極対決的な発想でやっていたのでは事を誤ると思います。

やはり多極的に、しかしプライオリティというものを排除するのではなく、多極的になればなるほどプライオリティを誤らないことが大切だと思うのです。

具体的に言えば、ご指摘のアメリカとの関係というのは、日本と中国との関係がどのようになろうとなるまいと、予見し得る将来において最も重要な関係ではないだろうか。その点で最も心配なのは守る政府与党も攻める野党もひっくるめて、アメリカに対して甘えている時期ではないということがこれほど言われながら、見方としてはかなり甘い見方が強いのではないだろうかという気がするのです。

現在の時点で考えますと、アメリカはここ当分の間依然としてアジアで、一方で中国と

のかかり合いを持ちながらも日本との関係が一ばん重大だという立場は変えないでしょうから、日本もアメリカとの関係が一ばん重要だと思っていれば、お互いにプライオリティとしては、アメリカの場合、ことアジアに関してはトップになるわけですから、日米関係をめったなことではないということは言えるかもしれない。

しかし、繊維の問題にケリがつく前でしたか、頭越しのあとに行なわれた貿易経済閣僚会議のいきさつを見ましても、たとえばジュースや牛肉の輸入自由化を断わったというようなことを、通産大臣が日本に帰ってトクトクと言う。国民の福祉というような点から言えば、日本の牛肉は国際価格にくらべてべらぼうに高いので、こんな高い牛肉を黙って食べているほうが、実はおかしいのです。牛肉の自由化ぐらいできなければ何を自由化するかと言いたいくらいの気持ちなんですけれども、アメリカに対して、言われたことを断わればそれがメリットになるような、妙なムードが依然としてありますし、野党は野党で繊維問題の政府間協定ができれば、それをたねにして通産大臣の不信任案を出すという、感覚的におかれているのか、少なくともズレ

ていますね。こういうズレた感覚でアメリカに対応して行けば、さなきだにゆらいできた日米関係というのは再安定化しない。もちろんすでに時代が変わってきたんだから、昔のような日米関係に再び戻るとは思いませんけれども、少なくとも最小限度必要な安定性さえも欠けるというようなことを懸念するわけです。

具体的にこれからの日米関係というテーマを見てみますと、一つは貿易の関係、一つはこの雑誌が出るころにケリがつくのかどうか知りませんが目下のところは懸案として残っている通貨の問題。三つ目はアジアその他開発途上国に対する援助で日米間がどこまで協力するかとか、いやなことばを使うわけですけれども肩代わりするかという援助の問題と、第四番目には防衛分担金の問題、安保条約に基づくアメリカの日本における防衛活動に対して、日本がどこまでシェアするかしないかという、おもな問題だけでも当面四つあるわけですね。通貨の問題というのは遠からず日米間だけで解決することも延期することもそうできない問題ですから、国際的な話し合いで解決するのでしょうか、あの三つに関しては、どの問題をとってもな

かなか解決しにくい問題で、つきつめて行けば、日米間だけの問題として解決しようとすればするほど、望ましくないような結果が出てきてしまう。防衛分担金の問題というのは、うっかりいじれば安保条約の基礎をゆるがすような紛争のたねになるので、これから方向としては、日米関係の再安定化という当面の問題を解決するためには、単に対米外交というよりもっと広い、グローバルな総合的な次元で対米外交というものを考えて行かなければならないのではないだろうか。そういう気持ちなんですけれどもね。

外交はオール・オア・ナッシング
ではない

中嶋 いまおっしゃったことに異論はないのですけれども、日本が今後日中関係、日米関係でかなりむずかしい立場に置かれてくると思うと、日本の国内にはナショナリズムが育っているわけですから、たとえば今後沖縄の次には北方領土というような問題に結びついて、古典的なイデオロギー的な状況に立ち帰る可能性があると思うのですね。

神谷 それは一ばんいけないですね。
中嶋 それは避けるべきなのであって、そ

ういう状況ではないし、ましてや軍備強化、核武装という方向で日本が偉大な民族であるというようなことになるべきではないのですね。日本のよさを見つめるということは、同時に、今後日本がもっと日本自身を開く、国際化時代に対処する日本というものを世界にさらけ出すことによって、世界が日本をありのままの姿で評価してほしいということですね。そういう意味で文化的な文明的な瀬戸際にこれから立たなければいけない。そういうふうに行くべきで、それがグローバルズムにつながると思うのですよ。そういう視野をこの際広く持つことが必要なのです。

ところが従来日本人というのは、オール・オア・ナッシングなんです。日米関係がいかなければ日中だという。沖縄がすめば北方領土だという。これはみなオール・オア・ナッシングの発想なんですけれども、これは外交において小さな「保険」をかけるという発想とも違うし、出口がますます狭まる方向なので、今後の日本がとるべき方向ではないですね。

日本人というのは、伝統的に中国に対して基本的に親近感があると思うのです。ところが、ソ連に対してはソ連ざらいが非常に多

いのです。これはいかなる世論調査をやつても、中国がいかに日本軍国主義を批判しようとも、中国とソ連を比べた場合は、ソ連ぎらいのほうが多いですね。これは戦後の第二次大戦におけるシヨリとか、スターリン体制に対する日本人のイメージとかいふものがあると思うのですけれども、ソ連自身は東ヨーロッパに常に足を引っ張られている。右からは東ヨーロッパ、左からは中国に常に引っ張られているわけで、そういうソ連自身の弱さもあるし、そういう状況の中でソ連を考え

た場合に、何もそんなにソ連ぎらいになる必要はないわけです。東ヨーロッパなどソ連が軍事的に支配していなければ完全に西欧化すると思います。西欧化というのはドブチュエクのなものかもしれませんけれども、ドブチュエクは政治的に失脚してもドブチュク精神というのは形を変えて残っているし、ますます拡大する。そういう形でいうと共產圏と自由圏というのはいわば古典的な発想なので、二十一世紀にかけての社会というのは、接近理論とか収斂論というようなことはよくはあまり好きではないのですけれども、もっとグローバルな国際化時代になると思うのですよ。そういう形に対応し得るような国際感覚とい

うようなものを日本人が身につけていく。これが同時に日本自身を開いていくことになると思うのです。

つまらないことを言いますと、東南アジアに行きますと、私は香港で生活していたのですけれども、マンゴーもマンゴスチンでもオレンジでもふんだんに食べられるわけです。最近グレープフルーツがはいえるようになって安くなっているそうなんですけれども、日本はいまだ古典的な発想から、そういう商品が入ってくるにすぐ農協みかん業者が集まって、それが圧力団体としてかわるわけです。

神谷 入れてみたらそれほどでもない、と……。

中嶋 そういう形で、日本自身が表向きはきれいごととしては自由化とか、国際化時代に出て行くとかいうようなことを言っているがやはり閉鎖的なんですね。

神谷 やつぱりおくられていますよ。

中嶋 それを直して行かなければいけない。マンゴーもうまいしマンゴスチンもうまい、しかも非常に安く食べられるわけですから、入れるべきなんです。それによってリンゴの味も本場にたためされ再評価されるわけですよ。いまのは非常に卑俗なたとえなん

ですけれどもそのぐらいの感覚を持つと同時に、それだけの自信を持っていいたいと思うのです。その自信を持った上で、外交ということを広く、単なる経済外交、大國間のかけひき、國連議場におけるハブニング外交だといふイメージから転換していく。外交とは単にそういうことではないという認識。これは外務官僚そのものが持つてもらわなければいけない、政治家が持つてもらわなければいけないので、そういう方向を出して行くことによって、あらゆる意味においてオール・オア・ナッシングの発想をこの辺で変えて行くことが必要ではないでしょうか。

日本がなすべきこと

本誌 変えて行くことをする場合の問題ですけれども、いまは国際化時代とか外交の時代になってきた中で、日本の国際感覚とか國際政治に対応して行く姿勢をもう一度考えなければいけないということなんです。が、基本的に外交關係というのは國家と國家の關係というようにいいますと、日本人というのは國家に対する意識は非常に欠落しているということもありますし、島國であるということから國際感覚とか外交感覚というのが

欠如しているわけで、それをすぐ持てと言つても持てないと思いますし、そういう中でまさに国際化時代に直面しているむずかしい問題があると思うんですが、われわれ編集者としてもたとえば大学紛争だとか、公害問題とか、国内の問題というのは比較的リアリティがあつてそれなりに対応して行けるんですが、国際政治の問題になると、国際化時代のわりにはどういふふうにとらえていいのか、リアリティを欠いているという気がするんですね。

神谷 もともと外交とか国際関係というのは一つ何か手を打てばきわ立つた成果が出てくるというものではありませんね……。そういう問題がある上に、戦後四半世紀の間ほんとうの意味での外交というのはなかったわけで、対米従属さえしていれば間違いないという……そこで鍛えられることもなかったわけです。

現実の外交で鍛えられる機会も少なかったし、われわれの外交感覚でなるほどと思わせられるようなことも少なかったわけですが、これからはいやおうなしに外交の時代に日本は押し出されるわけです。日本としてはいろいろむずかしい条件はあるけれども可能性と

してはこれからだんだんふえてくるというふうに受け取れば何もそう悲観することはない。そういう新しい環境に置かれれば、今度はどこかのシェルターに隠れようたつて隠れるシェルターはないんですから、リアリティというのはだんだんつちかわれて行くと思いますよ。

ただそれはヨーロッパのまっただ中で何百年も生きるか死ぬかの経験をしてきた国にくらべれば、まだまだ日本というのはいくら努力をしたつて、それ並みの外交感覚、国際感覚というのは持てないと思うんですけれどもそれは国なり民族なりの置かれた条件でそうなっているんですから、いきなりリアリティがないということとまどつてはいけないんです、ステッパ・バイ・ステッパ、とにかくあまり多くを望まず……。多くを望まないという点が重要だと思えます。いままでのアメリカとのつき合ひではかなり望んでもそれが満たされたという点で、これまた今後心すべきことだと思えますけれども、あまり多くを望まないでコツコツとやつて行くということとしかないのでないですか。

本誌 日本もきれいごとばかり言っているはいけない、何か役割を果たさなくてはいいけ

ない。

しかし外交という面をとつて見ると大した役割は果たせないというのが現状だというお話がありましたが、そうすると日本のやるべきことは何だろうかと考えて見ますと、外交以前の問題、たとえば東南アジアあたりで紡績の技術を教えるということは、単純だけれども大事だと思うのです。紡績だけではなく違つた産業の技術でもいいけれども……。

やはり日本の果たすべき役割というのは、外交以前の問題、東南アジアあたりに行つてただ金を出すだけではなしにしんぼう強く紡績の技術を教えるとかというふうな、非常にじみで……。

中嶋 それを外交以前とおっしゃるけれども、それを外交以前と考へた考へ方から脱却しなければいけないんで、それが今後の日本の外交の一ばん大きな問題だと思えます。

文化交流というのを一口に言いますけれども、それを含めて文化交流、技術交流のそういう分野で日本の果たすべき役割というのは非常にあるし、それは同時に日本自身をわれわれが見つめることになるし、日本を考え直すことにもなるわけです。これが非常に片手落ちだったわけで、それは外交以前でなく

外交なんですよ。

本誌 たえば、東南アジアという所はみな、なまけ者で不器用でばくみしたいのばかりがたくさんいるわけですけども、(笑)そういう国のめんどろをみることは中共もいっほどにはやらないと思うし、日本くらいしかやるところはないわけで……。

中嶋 それはたしかにおっしゃるとおりですね。ぼくも非常に残念だと思ったのは香港に一年半いまして、ふた月に一べんくらいシティ・ホールで日本文化の紹介みたいなタベがあるわけです。大体映画なんです。その映画たるや日本ではもうだれも見えないような古いチャンバラか、フジヤマ・ゲイシャ的などうしようもないような日本紹介しかないんですね。これは外務省のことになると思いますが、これも、もっとハイ・レベルな文化感覚を持った人たちがそういう役割を果たすような先兵的なことも考えて行かなければいけないですね、非常に大事だと思えますね。だからますます日本のイメージは悪くなっちゃうわけです。

雪之丞とか何とか……それが日本だと向こうの人は思うわけでしょう。雪之丞ならいい

けど江戸城何とか変化とか……要するに変なドタバタだけなんです。

文化外交を實踐せよ

神谷 そういう意味ではたしかに対米中ソということより、これからの外交というのは一体どういうものなのかという点の、これはいまの話にも出ているように考え方としてはわかってきているんで、それをどこまで思い切つてやるかやらないかという問題ではないですか。

中嶋 それはやろうと思えばできるとぼくは思いますね。

神谷 できると思うんですよ。日本のイメージアップというかPRなんかにしたって、一九六九年のちょっと古い数字ですけども国の予算でやっている文化広報費というのは七億円かな、七〇年にはたしか九億円くらいにかなりハイテンポでふえてはいるんですよ。しかしアメリカは六九年で円換算では約百倍ですね、七百倍。西ヨーロッパの一流国がその間の十倍ぐらいのところですね、五、六十億以上。そんなに差があつてうまく行きっこないですね。そこへ持つてきてそれを支

えている感覚がフジヤマ・ゲイシャ的な感覚でやれば何をか言わんやで、一方そういうった予算をふやすと共に文化広報というのは外交上どういう意味を持つかということを基本的に考え直せば、相当新しい思い切つたことができるはずですね。

中嶋 あれだけのドルが余っているわけですから外貨をそれに使えばいいわけです。西ドイツなんかでもゲーテ・インスティテュートですか、日本の文化センターよりはるかに充実していますね。

うちの大学にも留学生がいるものですから関心があるんだけど、やはり日本のお役所のなわ張り争いなんだな。東南アジアからの留学生の問題にしても、今度ジャパン・フアンドミたいなものができるわけでしょう。

神谷 どこまで具体化しますかね。たいへん壮大な計画ですよ、あれは……。

中嶋 あれが具体化する段階でまた文部省がやるか外務省がやるか文化庁がやるか、留学生の受け入れという最小限度の文化交流に關してもたいへんななわ張り争いがあるわけです。そういうことではだめですね。その辺の転換からはかつて行くことと、国際感覚は

国民の間にリアリティがないという話ですけれども、国際問題というのは身近な日常茶飯事とは違いますからそうなんですけれども、リアリティというよりも新しい時代に対する

日本の役割とか、いま日本に新しい時代における日本の使命が要請されているんだということをも十分フォローしたような新聞報道が少ないと思うんです。これはマスコミの責任が非常に大きいわけで特派員なんていう人たちがどれだけ国際感覚を持っているかというのと、ぼくなどが見て特に中国とか東南アジアが悪いですね。むしろ東欧関係をフォローしている人たちは各社ともわりあいいいと思いますね。

神谷 それと、現実感覚ということ言えば外交、国際問題というのには大なり小なり伴うものでして、本来遠いものだという点がなくなりますと、中国が国連へ入れればすべてもうよくなっちゃうような錯覚におちいるわけで、あるいは国際政治の論理というものはわれわれの日常的な論理と全く同じものであるはずだ、あるべきだということであつて走ってしまう。実はそうではないということは厳としてあるわけでして、そういうところから

出てくる隔靴搔痒の感であれば、その隔靴搔痒の感はいささかあったほうがいいとも言えるんではないですか。

中嶋 ぼくはよく外務省のことを悪口言うのですけれども、外務官僚の任用制度も含めてましてキャリア・ディプロマットのあり方というものを本質的にもう一度考えなければいけない時期にきていると思いますね。いままのような時代に対応できるような外務官僚をつくっているのか、つくる制度があるのかどうかということも含めて体質を改善して行かないと……

むしろ、出先に行きますと日本の外務省というのは日本人の間でも評価が高くないわけです。商社の連中なんかも不満を言っているんだけれども、外務官僚だけではなく国際社会の第一線に立つ人たちの教育とか訓練ということももっと考えていいと思います。

神谷 さりとてアメリカ式の政治的任命制度みたいなのが日本の場合に適しているかと言われれば、基本的にはいまの制度しかないと思うんですけれどもね。その点では中島さんと違ってキャリアの制度というのをよくないと極めつける勇気はないのですけれども

ね。

中嶋 制度はそれでいいと思うのですけれども、ガリ勉型の勉強をしてきて外交官試験を通じて、エスカレーションに乗るというタイプが非常に多すぎるわけでしよう。そうではなくて、実地訓練みたいなことを、日本文化とかそういう問題を含めて修得させるような機関がぜひ必要ではないかと思うんですよ。

神谷 人を使えばいいんですよ。いままでは斯界の権威という表現が古くなっちゃうんだけれども、そういういろんな人を使って文字どおり多角的な——これは手段のほうの多角化ですけれども——外交をやるといふことはあまりやっていなかったもので、何も自分でそういう教育を受けなくとも考え方としてそういう点さえマスターしていれば必要に応じてどんどん外からふやして使えばいいんですからね。だんだんそういうことになってきますよ、そういうことにならざるを得ないのではないですか。

本誌 時間もきましたので、この辺で終わりにしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。